



トキオキファンタジー  
フ★ア★ル★

「いけない、もうこんな時間！？夜更かししちゃったから・・・！皆、おはようござっ・・・、あれ？」

時は、冒険者がジエンディアに召喚される数年前。

「誰も居ない？どこに行ったのかな。・・・あ、置手紙」

まだイリス一行が、“伝説”と呼ばれるようになる前の話。

「何かしら。えっと・・・『お昼に、枯れ木の森の石塔でピクニックをします。イリスも来てね。ムーウェンより』？・・・ええ？」

正確には、その伝説の始まりでもある旅の途中。これといって珍しくもない、ジエンディアの朝だった。

イリス一行の一人である少女・・・ジョアン・ファームは、神妙な面持ちで、同じ一行の仲間である——彼女にとって、その言葉は皮肉以外の何物でもなく、失笑を禁じえないだろうが——カズノ・ナスと対峙していた。普段は外見年齢に不釣り合いなほど大人びた印象を与える彼女も、更に独特な雰囲気を持ったカズノの前では、ある程度年相応に見えている。

いや実際、今のジョアンは、どちらかといえば外見年齢通りの少女なのかもしれない。少なくとも、カズノは驚愕と共にそう感じつつあった。

彼がジョアンに呼び出されたのは、つい先刻の事である。しかし、彼がジョアンを問い詰めたり、彼女の元を訪れる事はあっても、ジョアンから呼び出された試しは未だかつてない。

ジョアン・ファーム。一行の中で、自分にだけは暗く冷たい本性を見せる女。前例がないだけに、一体どんな用件なのか、皆目検討も付かない。

僅かな興味と警戒を胸にカズノが訪れた場所で待っていたのは、勿論ジョアン・ファーム、その人である。だが、彼が驚いたのは、別に彼女が時間通りにその場に居たからだとか、そういったことではない。

疑問と驚愕の原因は、いたってシンプルだ。しかしそれを言葉にするととなると、非常に困難である。そもそも適切な言い回しが見当たらない。

ともあれ、ジョアンは固く引き結ばれた唇を開き、彼にこう切り出したのだ。

「こういう事は、お前の方が詳しいだろう？随分長い時間を掛けて、あの娘を懐柔したんだからねえ」

そんな少女らしからぬ口調に似合わない、ふわふわのヌイグルミや、可愛らしい木彫りのオモチャなど、子供の喜びそうなものが一通り揃ったエリアスのファンシーショップ。その一角にある棚を背に仁王立ちするジョアンを前にして。

「全く、とんだ茶番に労力を使わせてくれる……。カズノ・ナス。何を呆けている。時間を無駄にするつもりか。……。ああ、安心しろ。お前に丸投げするのは癪だから、候補はいくつか考えてある。見ろ、この木彫りのジャイアントの精巧さ。匠の技だろう？」

半ば放心しそうになりながら……。カズノはとりあえず、何処ぞの姫に負けず劣らずふてぶてしい態度の知人に対して、一つ。まずは聞かねばならない気がした。

……。それは、新手の嫌がらせなのか？

所変わって、片や砂漠、片や海岸という極端な土地に面した風と共に砂塵と潮の香りが漂う都市エルパ。

一見住みにくく近寄り難い印象を与えるが、ロマンと見所溢れる名所ピラミッドに、オアシスの豊かな実り、偶に凶暴化したモンスターが入り込んでくる事を除けば羽を伸ばすにはうってつけのビーチを両脇に構えている事もあり、観光客は勿論の事、財宝を求める冒険者の拠点としてもよく利用されていた。

「ムーウエン！そろそろ決めないと、もうお昼前よ！」

僅かな波の音が、時折、街の向こう側から響き渡り、心地よく鼓膜を震わせる。

そんなエルパ都市のアクセサリ―露店前にて、溜息混じりの怒声が上がったのは、その言葉通り、正午を間近に控えた頃だった。

ふわふわと宙に浮く妖精の少女、ジョエ。普段は巻物に封じられているが、打倒魔王をにかけて旅するイリス一行の一人であり、彼女が現在叱り付けている、よく言えば優しそうな、悪く言えば気の弱そうな少年、イリス一行では最年少にあたる“ナ・ムーウエン”のお目付け役でもある。

「うーん。だけどあれもいいし、こっちの羽がついてるのも似合いそうだし……」

「もーっ、ほんっとに優柔不断なんだから！いい？こういうのはね、気持ちがかもってればいいの！質よりハートよ、ハート！」

「そ、そうかなあ・・・」

身を乗り出して主張してくるジョエに、思わず後ずさりしながら相槌を打つ。

「そーなの。大体、相手はあのイリスよ？ムーウェンからプレゼントされたら、趣味の悪いジャイアントの木像でも飛び上がるくらい喜ぶよ。多分！物を貰うイコール幸せのゆるゆる思考なんだから！・・・多分！」

「ジョエ。あのさ、それってもしかしくなくても、凄くイリスに失礼じゃ・・・」

・・・もっとも、ジョエの言い分は、確かに的を得ている気がしていた。

それがいくら素敵な贈り物だったとしても、嫌々渡されてはきっと嬉しく思えないだろうし、逆に粗末なものであっても、誰かが心を込めて渡してくれたものなら、きっとその思い出と一緒に一生の宝物になるだろう。少なくとも、ムーウェンはそうだ。

「もう！ムーウェン！あんたに再三待たされる私の事はどうでもいいっていの！？」

「いたたた！ごめん。ごめんってば。なるべく早く決めるから、耳をぎゅうってするのはやめてよー！」

ただそれが判っていても、ムーウェンは悩まずにはいられなかった。

何しろ今日は、ムーウェンにとって。

いや、恐らく彼を含む他の仲間達にとっても。

そして何より、プレゼントの相手・・・イリス・イヴィエールにとって、特別な日なのだから

。

一年で一度しかない、大切な一日。

そう。

——今日は、イリスの誕生日だ。

## そして少年は駆け出した

---

誕生日会、と言うと聞こえはいいが、実際はそんなに大袈裟なものではない。

時を遡ること数日前。次の目的地であるベス都市に向けての出立を控えた夜の事だ。

エルパでの情報収集で、近頃アガシュラに不審な動きがある事を知ったレビが、念の為国王であるラジャータの耳に入れておきたいということで急遽予定を変更。ラジャータがアガシュラの動向を探らせる数日の間、出発を引き伸ばす事になったのだ。

その為一行は現在、タウンポータル——まだ一般には解放されていないが、各都市へ一瞬でワープすることの出来る転送装置で、今回特別に使用を許可されたのだ——でエリアスに戻り、ラタージャの厚意で用意された宿に宿泊していた。

イリスは長旅の疲れが出たのか、あてがわれた部屋にこもっている。偶にはこんな時があっても良いだろうと、他の者達も思い思いに休日を満喫し始めていたのだが・・・。

丁度そんな時だ。一枚の用紙と真剣ににらみ合っているムーウエンを見て、不思議に思ったバン・ギウが声を掛けたのは。

「ムーウエン、それ今朝配られてた情報紙か？」

「わあっ。び、びっくりした・・・いつ入ってきたの？」

目を白黒させるムーウエンをそのままに、彼の手からチラシを摘み上げる。

ムーウエンが困ったように呻くのを聞き流し、バン・ギウは僅かに唇を尖らせながら、読みやすい文体で綴られた見出しを読み上げた。

「何々・・・エルパ都市の伝統工芸品でもあるアクセサリーが、今十代の女の子を中心にブーム・・・。なんだムーウエン、女物のアクセサリーに興味があるのか」

問われて、ムーウエンは慌てたようにきょろきょろと、部屋を見渡した。まるでそこに居ない誰かが、自分達を見ていないか気にするように。

そして室内に、バン・ギウと自分しかいない事を確認し終えたのだろう。おずおずと口を開く。

「ううん。ボクじゃないよ。・・・あのね、明日イリスの誕生日なんだ」

「へえ、そうか。イリスの誕生日な一・・・って、何い!？」

「シーッ!こ、声が大きいよ!」

思わず取り落としたチラシを、ムーウエンが唇に人差し指を押し当てつつ急いで拾い上げる。

小さい頃からイリスを知っているムーウエンやカズノと違い、その他の仲間たちとは、一緒に旅を始めてからまだそれほど長い時間を過ごしたわけではなかった。

考えてみれば、自己紹介すらまともにしたことはなかったかもしれない。ある者は成り行きで、ある者は正式な手順を踏んで。そしてイリスが信用したなら、その人物は経歴に関係なく“仲間”と呼ばれる。

カズノが保護者の役割を請け負っている事もあってか、今のところはこれといって問題も起きていない。それもそうだ。皆が——少なくともバン・ギウが知る限りにおいては——魔王を倒したいという一つの想いの元に集っているのだから。

ともあれそんな事情もあって、バン・ギウを含め、エリアス以降に出会った他の仲間たちは、誰一人としてイリスの出自、名前以上の事は知らなかったのである。そもそも先を急ぐ一行に、誕生日を改まって祝うような時間的余裕はあまりないので、仕方がないといえばそれ以上の言葉はないけれど。

「中々選ぶ時間がなかったけど、バスに行くまで少し時間があるみたいだから、明日見に行こうと思って。国王様がね、エルパまでだったらタウンポータルを自由に使ってもいいって言ってくれたんだ」

「なんだよ、水臭いな。もっと早く教えてくれれば良かったのに」

「え、一緒に祝ってくれるの？みんないつも忙しそうだから、言ってもいいのかなあってずっと迷ってて……。無理に祝ってもらったりしたら、イリス、気にするかもしれないし。だからボクだけでも……。あ、カズノお兄さんもだろうけど、時間がある時にお店に行って選ぼうかなって」

意外というほどでもないが、純粹に不思議には思ったらしい。ぱちくりと、焦点が合わない大きな瞳を瞬かせながら言われてしまい、しばし言葉に詰まる。

巻物で休息を取っているのでなければ、今頃妖精少女の鋭いツッコミが入ったのかもしれない。そう胸中で呟きながら、バン・ギウはがっくりと肩を落とした。

確かにムーウエンからしてみれば、自分達はまだ出会ったばかりの腹の割れていない大人で、遠慮をする事も、一緒にいて不安を感じる事も少なくはないだろう。少年の迷いを、安易に叱る事はできない。

第一、ここでムーウエンを叱ろうものなら、ジョエから後でどんな文句を言われるか。

「まあ、わからなくはないけど。でもさ、やっぱりオレだけじゃなくて、他の皆にも教えてやろうぜ。オレの勘じゃあ、オレ達の中でイリスの誕生日を知りたくない奴は一人もいないだろうしな！」

目的が定まっているのなら、後は早いものだった。

イリスが宿で休んでいる間に、彼女の誕生日について話す為、他の仲間達へ連絡、召集。そして明日の昼間、イリスをある場所に呼び出して、皆で一斉にプレゼントを渡すと言うささやかなイベントを企画した。

何故わらわがイリスの為に、と最初は不服げだった黒月姫だったが、夜には既に用意を済ませている程度には、速やかに準備が始まっていた。やると決めた以上、すぐに行動を起こすのが姫の長所でもあり、事を急ぎすぎるという意味で見れば、短所でもある。とはいえ姫の行動力は、短所にもなり得るといふ懸念を除いてもずば抜けているので、イリスを含め、誰も危惧はしていなかった。今回のような時に、最も心配の必要を感じないのがその証拠だ。

大体、歯止めが聞かなくなった時は、自分達が止めれば良いのだ。足りないものを補い合えるのも、仲間の特権なのだから・・・——などと、バン・ギウが感慨深げに自問自答して頷く頃には、既に小さな誕生日会は目前に迫っていた。

場所に関しては、当初いくつかの案が出たものの、最終的に枯れ木の森にある石塔前ということで落ち着いた。

理由は勿論ある。一つは、一行がちょっとした誕生日会を行うにあたり、エリアス都市は賑やか過ぎること。もう一つ、寧ろこれ故にと言っても過言ではないだろう。その石塔のある場所と言うのが、かなりの高所・・・つまり、見晴らしのとても良い場所であるということだった。幸いにして、イリス一行の中に高所恐怖症の者は居ない。

予定は正午。計画と言うほどのものはなく、ピクニックという名目でイリスを誘い、昼食がてらプレゼントを渡すだけだ。

しかし、アガシュラの動きが気になる手前、全員が全員休日を満喫するというわけにもいかなかった。最低でも、誰か一人は、エルパ付近で動きを探らなければならない。

そんな話し合いのもと、オルカ海岸への偵察は、シャオが請け負う事になった。

「私の分も、イリスさんのお誕生日をお祝いしてあげてくださいね。・・・ああそれと、ムーウエンさん。私のプレゼントもイリスさんへ渡して貰えますか？」

「もちろんだよ！ありがとう、シャオおねーちゃん！」

エルパ都市のタウンポータルで受け取った小包みを、大切にリュックへしまい込み・・・  
・ムーウエンもまた、イリスへのプレゼントを選ぶべく、アクセサリー店へと駆け出すのだった。  
。

当然ながら、各々の時間は等しく流れ・・・——正午は、これといって何事もなく訪れた。

ムーウェンから言わせれば、無慈悲に。決して一秒たりとも待ってはくれずにやって来た、約束の時間。いつも背負っているリュックを妙に重たく感じながら、彼はひたすら走っていた。

太陽は高く、天から緑の大地を見下ろしている。それを意識しながら、ただ足を前に投げ出していく。疾走する身体に意識をゆだね、見え始めたウィンピークの群れを尻目に、ただただ進んだ。

「ムーウェン！ほら、もう皆集まってるよ！早く早く！」

「はひ、ふあ・・・、見え・・・て・・・、ふう・・・、るよー・・・！」

「頑張れムーウェン！私ずっと浮いてるから、正直全っ然わからないんだけど、ムーウェンが辛そうだからとりあえず応援するね！」

「うううう」

「あれ？どうして泣くのよ？ねえムーウェンってば。あ、今更だけどウィンドウオーク掛けた方がいい？遅いし」

「あうううううう」

そんな事を真横で叫んで来るジョエの声に、何故だか涙が止まらなくなる。

心底わけがわからない、と言った風に、全力疾走するムーウェンの隣を悠々と浮遊しながら、ジョエがぎよとんとして首を傾げた。結局、疑問は疑問のまま、石塔のある木の下へ辿り着く。ムーウェンが、ふあふあと大きく深呼吸を繰り返していると。

「はあー・・・。つ、疲れた・・・」

「おーい、ムーウェン！こっちこっちー！」

真上から名前を呼ばれ、火照った顔を上げた。

石造りの高台は、体力の磨り減ったムーウェンを試すように、どっしりとそびえている。その頂上で、バン・ギウが大きく手を振っていた。頭上の太陽を背にした彼の顔に、浅く影が掛かっているのが見える。此方を見下ろした事でズレたのか、いつも掛けているフレーム眼鏡の縁を押しさえていた。

そして見下ろして来る仲間たちの中に、当然ながら、今回の主役の顔もある。

「ムーウェン！大丈夫ー？」

ムーウェンが、その呼び声を聞き間違えるはずもない。

幼馴染であり、友達でもある。デル族最後の生き残り。しかしお世辞にも、魔王を倒せるよ



うな、特別な人間には見えない。

素朴な柔らかい顔立ち。デル族の特徴なのか、優しい色合いの髪を長く伸ばしている。今はそのまま流しているが、小さい頃は、何度か三つ編みにするのを手伝った事もあった。

イリス・イヴィエール。その人が、バン・ギウと同じく手を振っている。

「イリス！ごめんね、遅くなって・・・」

「まだお弁当をあけてないから、お昼じゃないわ。私もさっき来たところなの。それより、一人で上がって来られる？」

「平気！今行くよ！」

置手紙まで書いて呼び出したのに、その相手より遅れるなんて・・・。と、かなり情けなくなり、自然と視線が下がっていく。

が、流石に、これ以上他のみんなを待たせるわけにはいかない。握っていた手を開き、走ってズレたリュックの位置を直してから、頂上へ行く為に垂らされたロープに手を掛ける。

半分ほど上ると、視界の隅で、草むらの影からグリーンウォーカーの子供が不思議そうに自分を見上げて来ていた。自然と、口元が緩む。

エリアス都市周辺のモンスターは昔から温厚な種族が多く、此方が攻撃をしかけたり、脅かしたりしない限りは、滅多に襲って来ることはない。グリーンウォーカーも、その比較的大人しいモンスターの一匹だった。

もっとも、この辺りは豊かな緑のおかげで繁殖が進んでおり、数はかなり多い。その為、うっかり尻尾などを踏んで怒らせてしまうと、集団に追い回された挙句、手酷い傷を負うハメになる初心者の冒険家も少なくないらしい。

「ムーウエン、あと少しよ！でも大変なら私がおんぶして連れてったげるから、無理しないでね」

「えっ、それはちょっと、ていうかかなり格好悪い、かな。・・・よいしょ」

そんなジョエの気遣いはさて置き、何度か滑りそうになりながらも、漸く辿り着いた頂上の景色は———壮観の一言だった。

地平線まで緩やかに続いていく、緑溢れる大地。ある一部で、時折思い出したように建っている民家・・・あの辺りは、恐らくベロスだろう。人口こそ少ないが、穏やかで、平和そのものを体現するかのようのどかな所だった。

ムーウエンと、イリス。そしてカズノが旅立った場所。始まりの町。

「ムーウエン！貴様、わらわを待たせておいて、のんきに景色など・・・！」

「まあまあ、黒月姫。別に遅刻したわけじゃないだろう？時間ぴったりだった、というだけさ」

ぽかんとしているムーウェンに、つかつかと近寄っていく黒月姫を引き止めたのは、カズノだった。石塔にやんわりと背を預け、どこか芝居がかった微苦笑を浮かべている。彼の表情に関しては、いつもの事なので誰も気にしていないようであるが。

彼の言葉は、黒月姫にとってレビとジョアンの次に影響力があるらしい。不満はまだあるようだったが、一理あると認めたのだろう。ふん、と鼻を鳴らして引き下がる。それを見やりながら。

「ご、ごめんなさい。どうしても決まらなくて・・・」

「ムーウェン、何か選んでいたの？」

「えっ、いや、その。えーっと・・・！そ、そういえば、レビさんは？」

首を傾げたイリスに、ぎくりと心臓がはねるのを自覚しつつ、聞いてみる。話題を逸らすという意図も勿論あったのだが、姿が見えないのを気にしたのも事実だ。が、些細な下心になど欠片も気付かない彼女は、誤魔化した事に罪悪感さえ覚えそうな声音であっさりと答えてきた。

「多分、まだ王宮で会議じゃないかしら。念の為に、ベス都市には暫く兵を置けらしいから」

「そういえばレビさん、騎士団長なんだよね。凄いなあ」

「なっ。騎士団長でなくても、レビ様は凄いのよ！それが判らないなんて、これだから・・・っ」

思わぬ言葉を聞き咎めた黒月姫に再び詰め寄られ、石造りの台ぎりぎりまで追い詰められる。背後は木で覆われて判り辛い、結構な高さがあるので、落ちるのは勘弁願いたかった。

「わあ！姫、お、押さないで！落ちるー！」

「ちょっと姫！ムーウェンが落っこちたらどーするのよ！」

「黒月姫、落ち着いて・・・！もうっ、カズノも笑ってないで手伝ってくれても・・・！」

「おい黒月姫！此処狭いんだから暴れるなよ！」

「・・・あ、危なかった・・・。ありがとー・・・」

泣きそうになりながら、姫を羽交い絞めにして止めたバン・ギウにお礼を言う。

聞こえたかどうかは定かではない。ムーウェンに背を向けさせる形で連行しながら、或いはされながら、二人は未だに騒いでいた。

「ええい、離せバン・ギウ！地味が感染る！」

「何い！？地味を馬鹿にする奴あ、地味に泣くんだからな！ってか、オレは地味じゃねえ！『さすらうチャラ男』の異名を持つこのオレに何を言う！？」

「威張れるような名かそれが！恥を知れ馬鹿者！」

と、まあおおむね、いつもの流れである。

姫が部外者を決め込もうとしていたジョアンに助けを要請し、彼女が面倒くさそうにバン・ギウをボウガンで小突いた辺りで、そろそろだろう・・・と、ムーウエンはリュックを下ろした。覗き込んでくるジョエを視界に留めつつ、イリスに向き直る。

「あのね、イリス。多分イリスは忘れてるだろうけど、今日は・・・」

その瞬間。

「あっ、そうそう！忘れるところだった・・・。みんな、実は、今日私の誕生日なの！」

「そうそう、イリスのたんじょ・・・え？」

彼女はごそごそと、持って来た革のバッグから丁寧に畳まれた布を取り出し始めた。

今まさに、さすらうチャラ男の眉間に矢を放とうとしていた黒月姫さえも、硬直してイリスを凝視していた。カズノの表情は相変わらずだが、いつもより若干瞬きが多かったのではないか・・・とは、後で受けたジョエからの報告であるが。

「だから、今日は・・・」

別に、サプライズをしたかったわけではない。

そう。そういう魂胆は、誰にもなかった。ただイリスが、自分の誕生日を意識している素振りはいくらか見せなかったもので、てっきり忘れているのだろうと思っていたのだ。しかし、それを差し置いても・・・きらきらと輝く彼女の眼差しに、果てしない違和感を覚える自分の第五感を、ムーウエンは止められなかった。

イリスの瞳の輝きは、プレゼントを期待する子供のそれではなかったからだ。寧ろ逆の・・・

「皆さんに、プレゼントを持ってきました！」

そうだ、これは親に贈り物をする寸前の。どちらかといえば、そういった類の笑顔なのだ。

暫しの沈黙。及び、思考の停止。場が凍るとはこの事であろう。

ツッコミ全般を買って出ると豪語していたバン・ギウも、流石にあんぐりと口を開けている。自分も、ひよっとしたら同じ顔になっているのかもしれない。

ムーウエンは軽い眩暈に堪えつつ、思考を巡らせた。何から言うべきなのか、思いついては消えていく。ほう、と感心したような声を漏らすカズノの意図など、いつも通り何一つわからない。判る気もしない。

ともあれ、少なくとも見る見るうちに眉を吊り上げていく黒月姫よりは、先に発言しなければならないような気がしたので。

「・・・あの・・・みんな・・・？」

何故周囲が驚いているのか、今一判っていないらしいイリスと視線を合わせる。

「あの、イリス。・・・誕生日だよ？イリスの」

「うん。だから・・・、・・・あ」

何故かと言うべきか、漸くと言うべきか。

一拍置いて。ぼむ、と。イリスが軽く手を叩く。

それはもう、たった今、目が覚めましたと言わんばかりに。けろりと。

「そういえば・・・誕生日は普通、プレゼントを貰う日よね」

「何をどう勘違いしたら、自分の誕生日にプレゼントをするって発想になるんだー！？」

「ごめんなさい！昨日からそれしか考えていなかったから、私の中ですっかりそういう日だって事になってたみたい・・・」

「あのさームーウエン。昔から思ってたんだけど、イリスって天然よね」

「えーっと・・・、・・・うんと、ちょっとだけ・・・？」

バン・ギウの渾身の叫びが、えらく的を得ているのは珍しい。珍しいが、今はそれさえも驚きの対象にはならない。限界を超えてしまったのか、たまりかねた様にバン・ギウを押し退けて、黒月姫が身を乗り出した。

ただし、いつもの冷たい一瞥でなく、鬼気迫る勢いで。

「イリス！自分の誕生日にレビ様にプレゼントを贈ろうだなんて、どういうつもり！？まさかレビ様に気があるんじゃ・・・！」

「姫、それはないと思いますよ。プレゼントの相手には、我々も含まれているようですから」

動じていない所か、退屈そうに欠伸を漏らしながらジョアンが至極もっともな事をぼやく。でもっ、と声を荒げる黒月姫を尻目に、バン・ギウがカズノの傍へ寄り。

「なあ、カズノ。姫ってレビが絡むと、なんて一か、おかしくならないか？」

「ふ・・・。恋は盲目というからな」

「あー成る程。目が見えないじゃ、そりゃどこぞに頭ぶつけて変になっててもおかしくはないよな」

「そこ！聞こえてるわよ！」

殺気立った本人に一喝され、不服そうに元の場所へと戻っていくのを見送ってから、ムーウェンは改めてイリスの手元を覗き込んだ。

彼女の手に残っているのは、数枚のハンカチである。清潔そうな無地のそれに、何やら凝った文字の刺繍が入っている。

なんとなく察しがついて、ムーウェンは顔を上げた。彼の考えを知ってか知らずか、イリスがにっこりと、彼の前に一枚を広げて見せる。明るく細い、金の糸で丁寧に綴られた文字。

「これはムーウェンの！ほら、ここに名前が描いてあるでしょう？」

ナ・ムーウェン。確かに寸分違わず自分の名だった。

「わぁ・・・！これ、イリスが縫ったの？」

「ほー、器用なもんだな。オレのもあるのか？バン・ギウってやつ！」

「わらわの分もあるんでしょうね？」

「もちろん！ただお裁縫は久しぶりだったから、みんなの分を作っていたら、夜中まで掛かっちゃって・・・」

「あ、だから部屋から全然出てこなかったんだ？これを作ってたんだね」

「内緒にしておくつもりはなかったんだけど、気付いたら夜だったから。でも、朝みんなに渡そうと思っていたら、寝坊してしまって・・・。起きたら誰も居ないし。でもピクニックをするって書置きがあったから、それならその時になって思ったの」

宿に入るなり、急いで部屋に戻っていくイリスの背中を思い出して、思わず笑ってしまう。確かにイリスは、具合が悪いとは一言も言っていない。全員分の刺繍を一日で済ませなければいけないと焦っていた彼女の表情を、疲労と見間違えたのだ。とは言え、刺繍を入れるだけで彼女が寝坊するというのは考えにくいので、本当に長旅の疲れは溜まっていたのかもしれないが。

ともあれ、これで残りの疑問は一つだけだ。恐らくこの場の、イリスを除く誰もが抱いているであろうクエスチョン。

「でもイリス・・・どうして？去年までは、こういう事はしてなかったのに」

嘘ではない。少なくともムーウェンが覚えている限り、イリスが誕生日にプレゼントを配ろうなどと言い出した事はなかった筈だ。

でも、ひょっとして・・・もしかして、自分が幼くて覚えていないだけで、過去同じような事があったのだろうか。そんな不安に駆られ出した時。

イリスが、おもむろに口を開いた。すっかり耳に馴染んでしまった、穏やかな声音で。

「だって、私がこうして此処に居られるのは、みんなのおかげだから」

「え？」

掌に置かれた、名前入りのハンカチとイリスとを交互に見やる。イリスは次に、バン・ギウへとハンカチを差し出した。うおー！と感極まって涙するバン・ギウの傍を通り過ぎ、更に黒月姫、ジョアン。そしてカズノ・・・一つ一つ、思い出を取り出すように、ハンカチを順に手渡していく。最後に、この場に居ない二人の分を、あとで渡しましょうと鞆へしまい込むと、満足げに笑ってみせた。

ムーウエンが大好きな、木漏れ日のような笑顔で。

「今一緒に旅をしているみんなが誰一人欠けても、私は此処に立ってはいられなかっただろうって思ったの。難しい事を一時だけでも忘れて、ただ自分が生まれて来れた日に感謝したりは出来なかっただろうって。そう考えたら、いても立ってもいられなくて。こういう日にこそ、私が感謝するべきだろうって。そう思ったから」

・・・おかしいかな？そう訴え掛けて来る少女の眼差しに、ムーウエンは小さく嘆息した。

呆れたのでは決してない。寧ろ、安心したのだ。イリスらしい・・・実にイリスらしい理由と、答えで。なんだか妙に納得してしまった自分へは苦笑を禁じえなかったが。

ムーウエンはそっと・・・本当にそっと、リュックから二つの小箱を取り出した。一つはシャオから預かったもの。もう一つは、エルパで選んだ自分からのもの。

「ムーウエン？それ・・・」

「あはは。・・・これじゃ、プレゼント交換だね？」

きょとんとしているイリスが見渡すと、いつの間にか、彼女以外の全員が、各々ラッピングされた箱やら包みやらを取り出している。

その様子をたっぶり十秒は見つめて。・・・はっとしたように、イリスは何度も瞬いた。それらが意味する事を知り、驚き・・・やがて、泣き笑いにも似た表情で周囲を見渡し、囁く。

「・・・ありがとう。みんな」

時は正午。

日はまだ高い。太陽は変わらず、ジエンディアを照らしている。

祝福はない。必要ないのだ。——彼女には、それを与えてくれる仲間がいるのだから。

少なくとも、今は、まだ。

「あ、そうそうイリス。ムーウエンのプレゼントは、私のと兼ねてるからね！」

「ええ！？ジョエ、急かすばかりでそんなこと一言も、むぐっ、もがもが……」

（シーッ！し、仕方ないでしょ。妖精の私に、人間の女の子が喜ぶプレゼントなんて判るわけないじゃない。そりゃ、イリスなら何でも喜んでくれるとは思ってたけど……。でもほら、年頃の女の子って、デリケートだって聞くし）

「うーうーっ……むぐぐ……」

ジョエが、今初めて聞いた事情に驚嘆するムーウエンの口を塞ぎ、

「うーん、流石妖精。したたかだ」

それ見たバン・ギウが、何故か神妙に頷いて、

「……………その感心の仕方はどうかと思うがな」

隣のカズノが、やれやれと肩を竦める。

気の知れた仲間達の、見慣れたいつもの光景。

けれどいつか、この日を眩しく思う時が来るかもしれない。いつか、たまらなく懐かしい思いで、振り返る日が来るかもしれない。

或いはもう、その時への旅は始まっているのかもしれないが。

それでもイリスは、魔王に脅かされてもなお美しいジエンディアの大地を背に、仲間達へとびきりの笑顔を見せた。

「みんな、今日はありがとう。本当に、ありがとう。そして……」

——これからも、どうか私と一緒に……魔王と戦ってください！」

一人は、彼女と共に歩む道のりを思い描きながら。

一人は、そんな少年を優しく見守りながら。

一人は、勇ましい姫君を賞賛するような眼差しで。

一人は、魔王はおっかないがやってやるぜ！と意気込みながら。

一人は、当然よ。今更逃げるなんて許さない、とでも言いたげに。

一人は、暗い野心を胸に、淡い微笑を浮かべて。

勿論、今此処にはいない、他の仲間たちも。

それぞれの想いで、それぞれの理由で、彼女の元へ集った者達。

だからこそ——……一行はイリスの笑顔に、大きく深く、頷いた。

『もちろん！』

刹那。

あっ、と、ムーウェンがイリスの背後を指差して、歓声を漏らした。次いで、バン・ギウの叫びが響く。

皆が続々と驚愕に目を見開いていく中、最後にそれを見たのは、振り返ったイリスだった。その彼女からも、やがて明るい声上がる。

雨雲の影さえなかった筈の青い空に、七色の橋が伸びていた。

長く、遠く。

鮮やかに。

そう。

今日は、イリスの誕生日。

虹が うまれた日